特223
787

同志社倶樂部講演集

NO. I

始

特223
787

同志社倶樂部講演集

NO. I

目次

大正十五年二月例會講演
南洋旅行の話　横濱高等工業學校長　理學士　鈴木達治

昭和二年一月例會及記念會講演
新島先生を憶ふ　番町教會名譽牧師　法學博士　綱島佳吉

同
新島先生より受くる感化　東京帝國大學教授　神學博士　松波仁一郎

昭和三・一・二〇
帝國圖書館

南洋旅行の話

鈴木達治

私は八月二十八日に、神戸を出帆致しましたモンテ・ビデオと云ふ船に乗りまして南洋に參りました。其の船は、ブラジルに移民を送る船であります。それで神戸から乗船致しました時に、丁度古谷重綱氏（校友）が、アルゼンチンの公使として、赴任せられる途中、矢張其の船で行かれることを知りました。

九月五日に、シンガポールに到着致します迄の間、同君と一處でありましたので、實に好都合でした。尙ほ其の船には、横濱から四五十人の移民が乘り、神戸から七百余人、總計約八百人近くの移民が、乘つて參つたのであります。無論移民船でありますから、中々移民者の爲めの設備が、よく整つて居るのであつて、船中は非常に賑や

かで、且つ愉快でありました。

其の移民の中には、たしか百幾人かの青年が居りまして、直ちに船中で、青年團が組織されました。そして團長も出來、船中で辯論會などを催されました。それで私も青年團から頼まれて、前後三回講演を致しました。人口問題とか、日本の食糧問題とか、移民問題とか、猶ほ私は南米の事を、調査したことがありますから、行つたことはありませんが、南米の事情に付いても、話を致しました。

シンガポールに船が著きました時、私が上陸すると、青年團も悉く上陸しまして、私に對して、簡單に別れの辭を、團長から述べられ、それから百有余名の青年が、萬歲を三唱して下さつたのであります。母國から千有餘哩を隔たつた英國の領土であるシンガポールで、さう云ふ多數の人から、萬歲を浴せられたと云ふ事は、實に思ひ掛けない事でありまして、今に愉快なる思ひ出として、私の心に殘つて居る次第であります。

シンガポールに船が碇泊すると云ふと、あそこをお通りになつた方は、御承知の樣に、船の周圍に、幾艘かの獨木舟がやつて來て、それに黑い人間が、乘つて居ります。無論裸で、一本の櫂を操つて、船客に貨幣を投げることを求める。つまり乞食であります。デッキの上から、船客が五錢か十錢のニッケルや銀貨を、海の中に投げ込むと直ちに船から水の中に飛び込み、其れを拾ひ取るのであります。これはシンガポールに寄港した人が、長い船中の、單調な生活の無聊を慰めるものであります。中々、黑い土人は巧みなもので、舟の上で、葉卷を吹かして居るが、金を投げ込むと、直ちに水中に入つて行つて取つて來る。取つて獨木舟の上に上がると、直ぐ又葉卷を吹かして居る。一体どこへ葉卷を隱して居るのか不思議に思はれる。非常に注意して見て居ると、手早く葉卷を火の付いた儘、口の中に入れて居るので、船に上ると、もう煙が立つて居る。中々巧みな藝當をやるので、これだけでも五錢や十錢投込む價値があります。實に此の獨木舟に乘つて居る黑人は、我々がシンガポールに到着して、上陸し

ない内に、既に見當る土人であります。余り考へない人は、之を普通のマレー人であると見るに違ひないと思ひますが、實はそうではない。これは今日マレー半島に、僅かに三萬人あるかないか位の、古い種族の者である。即ち非常な昔、マレー半島に住んで居つた土人（アボルジンス）であります。日本で言へば、アイヌ人種に相當するものである。此等のアボルジンスを探すには、半島の山又山を越えて行かなければなりません。密林又密林に分け入つて、探さなければなりません。然るにシンガポールに船が著くや否や、我々が一番先に對面する人間は、其の稀なる人間であることは實に珍しい現象です。其の頭の髪を見ても、顔を見ても、今日の所謂マレー人とは違つて居ると云ふ事は、我々旅客にも相當に識別が出來るのである。でこのアボルジンスは、所謂海峽殖民地と云ふ地域内には、極く僅かしか居らない。或は四十人とか、五十人とか數へる程しか居らないから、注意に價すると思ひます。シンガポール、ペナン、マラッカと云ふ樣な、マレー半島の西の方に、點々として居る地域を海峽殖民地

即ち「Strait Settlement」と言つて、英吉利が完全に支配權を、昔から持つて居るのである。英領マレー半島の中には、海峽殖民地の外に、尙ほマレー聯邦と云ふものがある。マレー聯邦には、州が四つありまして、其の聯邦の首府は、ペナンとシンガポールの約中間に位するセランゴール洲のコーランポーと云ふ處に在つて、聯邦の政治はそこでやつて居ります。此の外に非聯邦と稱するものには、洲が五つあります。非聯邦の洲は、サルタンの政治の下にありますが、無論英吉利が其の政權を握つて居ります。此のマレー聯邦と、非聯邦と、海峽殖民地とが寄つて、所謂英領マレー半島を爲して居る。英領マレー半島に、人間がどれだけ居るかと云ふと、三百三十幾萬人と云ふ者が居る。そして土着のもの、所謂アボルジンスと云ふ者は、先程申した樣に、三萬人に減じて居るのですから、又全く原始的の人間であるから、マレーの生活には、先づ關係がないと言つてよいのであります。其の大部分は殆んど、北の方の沼地に、所謂遊牧の民として生活して居る丈けであります。三百三十何萬人の中には、三萬幾らの土

人も無論含まつて居る。マレーの人口の狀態と云ふものは、最近の統計によりますと此の十四五年の間に、三割以上增加して居る。然るに此のマレー半島に於ける出產率と死亡率とを見ると、死亡率の方が多く、出產率の方が少ないのに拘らず、人口は斯くの如く增加して居る。若し斯う云ふ率で、日本の人口が增加したならば、直ちに一億人を突破します。そうなると、食糧問題とか、人口問題と云ふものは、逆鉾立になつても、解決が出來ますまい。マレー半島は、何が故に、斯くの如く、死亡率が多いのに、人口が增加したかと云ふと、これは無論、他の方面から移住して來た爲めであります。其の移住を誘つたものは何かと云ふと、護謨の栽培であります。護謨の栽培は、斯くの如く十數年の間に於て、三割以上の人口の增加と云ふものを來たして居る。マレー半島が、近年非常な活氣を呈して居ると云ふことは、之れを以ても分る次第であります。

元來護謨樹は、南米アマゾン河の流域に野生して、澤山あつたのであります。護謨

を採るには、護謨の木に傷を付けて、まづ護謨液を採取します。植物學專門の三宅先生が、お出でになりますから、甚だ話がしにくいのですが、此の護謨の木はアマゾン河の流域に野生して居りますが、此の方面から、護謨を取るのは、中々容易の事でない。一噸の護謨を、アマゾンの流域から出して來るには、人間の命が二人分要ると云ふ樣な評判がありました。是は無論歐米人の命ではなく、アマゾン流域に居る處の、土人の命であるにしても、一噸の護謨に二人の犧牲を拂ふと云ふ樣では、長續きのするものではない。五十年前に、英吉利人が此のアマゾン河の流域から、野生護謨の種子を持ち出して、これを英領の何處か熱帶地に植えたならば、非常に利益を得るであらうと考へ出した。然し護謨の種子を、アマゾン河の流域から取り出すことは、中々困難の事である。なぜなれば、ブラジル政府が、非常に嚴重に種子の輸出を、禁じて居るからであります。色々苦心の結果、漸く七萬粒の護謨の種子を、アマゾン流域から盜み出して、英吉利に持つて歸つた。而して、御承知の倫敦キューガーデンの溫室で、此の內

から、二萬有餘の苗木を作り立てました。それをセイロンに移して、セイロンから又諸所に移した。爾來五十有餘年を經過した今日、マレーキ半島、廣く言へば、南洋に於ける處の護謨樹は、皆其の子孫と云ふべきであります。初め二十五年の間と云ふものは、護謨に對して全く利益がなかつた。初代の統計に依りますと、一本の護謨樹から、一ヶ年に僅かに一封度か、一封度半位の護謨しか得られなかつた。一封度半の護謨は、今日の相場で、一封度一圓として、一圓五十錢である。さう云ふ樣な狀態では、とても護謨栽培から、利益を得られる筈がない。然しながらセイロンには、植物試驗場がある。或はマレー半島の試驗場、ジャバの試驗場など、各所の試驗場に於て、栽培に付て研究して居るのであります。殊に此の護謨の木から、護謨液を取る事を研究した結果、栽培を初めてから、約二十五年の後に、護謨を多量に、且つ有効に取ると云ふ樣な事が成功して、終に護謨栽培業は、今日の樣に盛大になつて來たのであります。

護謨樹から護謨を採取し初めるのは、植付から大概六七年位してからである。其の護謨液を取るには、木に傷をつけて取るのでありますが、傷の付け方に色々な方法があります。今一番普通に行はれて居る方法を申上げますと、樹幹の半面に、V字形に傷をつけます。無論木の幹に傷をつけるのではなくして、樹皮だけに傷をつけて、其のV字の先の處に、ブリキで造つた樋をつけて、其の下にコップの樣なものを受けて置くと、護謨液は樋を流れて、コップに入ります。此の傷を付けて護謨液を採取することを、タッピング「Tapping」と申します。それには色々なやり方がありますが、護謨樹に今日一度タッピングをやると、翌日は休んで隔日にやるのが最も普通の樣です。流出の止むまでには、一時間か一時間半位かゝります。丁度人間の皮膚を傷けると出血する、暫くすると血が凝結して、出血がやむのと同樣であります。之を隔日に、成るべく薄くタッピングをやります。故に半年位タッピングをやりましても、僅か一寸五分か、二寸位樹皮を切り下げるに過ぎない位です。

護謨液はラテックスと申します（實物を示す）。V字形に傷を付けた處から、流れて出るものは、この樋（實物を示す）、斯う云ふ形をしたものを通つて、コップ（實物を示す）の中に流れ込む。このコップは、針金で輪を作つて、其の輪で支へて、之を樹に結び付けて置くのであります。それから是は護謨の種子であります（實物を示す）。之を七萬粒、アマゾン河の流域から持つて來たのであります。護謨の種子は當初は一粒たりとも、疎かにする事がなかつたのでありますが、今は幾らでも栽培林の中に、落ちて居ります。それから護謨樹から流れ出て、コップに集つた所謂ラテックスは、苦力が皆バケツに集めて廻はり、そして木で造つたもの、或は白いタイルで張つた處の淺い器の中に移し、其の中に醋酸の薄めたものを、或る量だけ加へまして、攪拌してぢつと置いて置く。器の中には枠で、幾つかの仕切りをする。而して、三四時間經つて見ると、外觀は牛乳と少しも變らない白いラテックスですが、入れてある枠を取出して、引上げて見ると、豆腐の樣になつて居る。然し豆腐の樣に毀れ易くはない。引き上げたものに、壓力を加へると、水分が容易に去つて、段々に厚いものは薄くなつて行く。段々にロールの中を通して、壓搾して水分を去り、薄くして行くと、終りには所定のシート、即ち護謨板になつて出て來る。其のロールに網の形を彫つたり、又は護謨園の名を彫つてあると、其れがシートに顯はれます。これは（實物指示）ロールを通つて來たもので、これを外に出して干して置くのであります。一日程干して置いてスモーク・ハウス、又はスモーク・ルームの中に入れて、其の下で焚火をする。其の熱の爲めに護謨が乾き、煙の爲めに燻されて飴色になります。四五日スモーク・ハウスに入れて置いて、外に出したのが、所謂シート・ラバーで、是れが商品となつて直ちに市場に出て行きます。同じ製法で、シートでないクレープ（實物を示す）と云ふものがある。クレープ護謨は白いものが上等で、此の品物は少し惡い方のものであります。一等品は是よりもつと白い。是れは何うして作るかと云ふと、之をプレッスする時分には、シートのプレッスと違つて、上下のロールの回轉度數の違ふものを使用し

ます。どちらかが早く、どちらかが遲い。其の速力の違ふロールの中に入つて、プレッスを掛けたものである。故に其の面は、シートの樣に圓滑でなく、全くの粗面であります。又これはスモークしないで、乾いたまゝで市場に出す。斯うして見ると、直ちにどう云ふ不純物があるかと云ふ事が分る。クレープはスモークしてないから腐り易い。こちらはスモークしてあるから腐敗し難い。魚で云ふと、生乾しと燻製との差がある。燻製したのは、生乾しにしたのとは違つて、腐る處れが少ない。製造法には斯樣に二種類あります。精しいことは、專門でありませんから分りませんが、そう云ふ樣にして護謨が出來る。之れは所謂原料護謨で、これを用ひて、種々なる護謨製品を作るのであります。

今日の護謨は、先程申上げました樣に、タッピングの方法が、うまく行く樣になつて、非常な好景氣を呈して來ました。アマゾン流域から出て來る處の野生護謨、所謂バラ護謨と云ふものは、勿論殆んど後を絶つと云ふ迄ではありませんが、世界產額の一割にも當らない。餘の部分は亞細亞方面、南洋方面から出て來る。私は初めにお斷り致しませんでしが、南洋と云ふ區域は、英領マレー半島も加へてのことにしますと世界產額の九割は、南洋方面から出て行く樣になりました。

英吉利人の、護謨栽培に注ぎ込んで居る資本は、一番大きなもので、日本の金にして九億何千萬圓、約十億圓に近いものです。其の次には和蘭人で、二億幾らと云ふ金を入れて居る。歐米人の內で、一番少ないのは亞米利加で、六千萬圓位しか入れて居らない。日本の投じて居る金は、八千萬圓以上である。亞米利加よりは、日本の方が護謨栽培には多く入れて居る。亞細亞人の投じて居る金は、五億でありまして、これは支那人が最も多いのであります。

それでは、原料護謨の消費は、どれ位かと云ふと、一昨年は、四十萬噸以上消費して居る。其の中で三十一二萬噸と云ふものは、亞米利加が消費して居る。亞米利加が一番少く栽培をやつて、最も多い四分の三以上の消費をして居る。英吉利は最近五六

年間に、非常に消費が少なくなつて、一萬二千噸位、殆んど亞米利加の三十分の一です。日本は二萬噸位消費して居る。英吉利に較べると、多いのであります。護謨と云ふものに對しては、亞米利加と英吉利との間に、色々な爭がある。栽培としては、亞米利加が最も立遲れをして居りますから、躍氣になつて、自分の植民地であるフイリツピンや、或はブラジル國を誘ふて、アマゾン流域に、護謨のプランテイションを、研究して居ります。兎に角、一方は生產を專らとし、一方は消費を專らとして居る。

日本の事情を考へて見て、どうかと云ふと、生產も消費も共々に、全く幼稚なものである。日本の消費は、多く護謨靴に使はれる。故に今年は兩年だと言へば、護謨の消費は多いが、若し天氣だと云へば、護謨の消費は少ない。實に幼稚であります。私は今度視察して來て、日本の消費は、實に幼稚だと思ひました。此れ畢竟日本の護謨の化學が、非常に幼稚な爲めです。故に之れを大いに發達させて、消費の點に於ては亞米利加を目標として進み、栽培卽ち生產に於いては、英國を目標として、進まねばなりません。尙ほ又原料護謨を製造するに、使用する醋酸そのものは、マレー半島のみでも、二千噸位使用すると思はれます。それは皆歐羅巴から輸入して居る。半島では和蘭の製品だと云つて居るが、皆獨逸の製品であつて、和蘭の商人が、取扱つて居るから、そう云ふのであると考へます。これが日本から行かない。世界戰爭中は、日本の醋酸が使はれて居たのでありますが、戰後は用ゐられません。これは日本の化學者の責任であると思ひます。醋酸などは日本から、送らなければならないものであると考へます。

今日シンガポールから、マレー半島の中に入つて見ますと、私が十七八年前に行つた時とは、餘程趣を異にして居る。十七八年前にシンガポールに上陸して、汽車で島を橫切つて、其の對岸のジョホール洲へ、小いさな蒸汽で海峽を渡りました。シンガポールの島を、汽車で縱斷する時、兩側を見ると、まだ大木が倒れて居る。密林の中は、人間は入つて行かれない樣に、樹木や蔓が生ひ繁つて居る。犬や猫でも、其の中を潛

つて行くのは困難であると思つた。水のある所が處々にあつて、虎か鰐でも居りそうでありました。汽車の中から、そこに落ちたら、何かに喰はれるであらうと思ひました。けれども今日では、そう云ふ密林（ジャングル）はなくなつて了ひ、殆んど開墾せられて、多くは護謨のエステートになつて居ります。今は前の小蒸汽で來た處は、汽車が出來て、濱名湖を渡る樣に、堤防が出來て、其の上を汽車が、向ふ迄通じて居る。シンガポールは、今では島の資格を失ひました。ジョホール洲を越えて、コーランポ迄行く間は、急行列車で十二時間掛ります。朝七時幾分かに發車して、晩の七時幾分には向ふに着きます。其の間絶えず、汽車の沿道を注目して居つたが、密林と云ふものは、殆んど少ないのである。皆、護謨のエステートに變じて居つた。護謨を採取するエステートになつて居らぬにしても、植付を濟まし、或は樹木を燒いて、野原にしてある。未だジャングルの儘で、殘つて居ると云ふ處は、殆んど少ない。汽車の沿道ばかりでありまして、奥深く行つたならば、密林のあることは、分つて居るが、汽車の沿道

は、それだけ發展して來ました。セイロンよりも何處よりも、マレー半島は、護謨エステートに適して居ると云ふ處からですか、非常に發展して居るのに驚きました。

護謨の栽培は、どんな風に殖えて行くか、又どんなに有望になつて行くかと云ふ事は、時間がありませんから、お話出來ませんが、專門家の想像して居る處によれば、護謨の將來は、非常に有望であるとの事です。數年前、護謨は非常に不況でありましたが、今日相當に護謨は、景氣が好くなりました。千九百三十年頃になつたら、護謨は大いに不足をするであらうとは、相當に有力な議論として、行はれて居ります。

日本人が英領マレー半島に、持つて居るエステートは、約十二萬エーカー（一エーカー約我が四反歩）で、昨年から護謨の景氣が好いので、可なり栽培園を賣却して、長い不景氣の間に出來た借錢を拂つたり、配當しなかつたものは、其の金で配當などもしたと云ふ事です。私はマレー半島のジョホール洲に在る、南亞公司のエステートに、一晩泊つて、栽培を見學しました。其處へ行くには、シンガポールから、小蒸汽

で海を超え、ジョホール河を溯り、約五時間かゝります。御承知の通り、このエステートは、東京の森村男爵が、專ら經營して居られるのであります。大正四年頃でしたが、私は藏前の高工に教授をして居りまして、當時同校の應用化學科の一出身者を、このエステートに世話いたしました。此の人は非常に忍耐强い、又健康な人で、吉原と申します。大正八年に、一度日本に歸つて來た切りで、爾來一度も歸らずに勤續して居る。私がシンガポールに着すると、同氏が態々迎へに來てくれまして、滯在約十日間、非常な世話になりました。護謨のエステートでは、どういふ仕事をして居るかと云ふ事を、見學のまゝ一寸御話致しませう。

エステートでは、朝は五朝頃から起きます。其處には六百三四十人も、使用して居りますが、其の大部分は、印度人と支那人で、マレー人は僅かでありました。日本人は三十人位。そして、それらは皆、朝五時頃に起きて、タッピングに出かけて行きます。エステートは、三千五百エーカー程ありまして、苦力一人で三百本位受持つて居

ります。一エーカーには、百二三十本の割で、植はつて居ります。朝起きてタッピングをやつて、二時間位經つた後で、バケツを持つて、一々コップに溜つて居るものを、バケツに取入れ、それを相當距離のある中央部の處に、持つて行きます。九時過ぎには、皆其のバケツに取つたラテックスを、中央の製造所に集めて來る。そこで先程申した樣に製造して、其の日の午後三時頃には、仕事がすつかり終ります。日本人なら、其れから風呂にでも入つて汗を流がし、休息し、夕方になれば、テニスでもして遊ぶとか、碁、將棋、玉突などをやつたり、音樂の趣味のあるものは、音樂をやつたりして、其の日を終ります。日本人は皆監督で、勞働者ではない。故に其の仕事は、タッピングがうまく行つて居るか、或は護謨の樹に、病氣が發生してゐないか、又木の葉の色や、生長の樣子や、色々な事を、毎日毎日、監督し、注意して居ります。又雨が降つて水が溜まると、其の排水をどうしたならばよいか、又傾斜の處では、土が流されると、其の土の中には、養分を含んで居るから、それが流されない樣に、防ぐ事を

考へる。マレー人や、印度人と云ふ樣なものは、始終お互に喧嘩をする。其時には一々、日本人に訴へて來るから、それらも適當に、處置しなければならない。そこに從事してゐる者が、病氣に罹ると、それらもそれぞれ、世話して行かなければなりません。又二三年前から、勞働法と云ふものが、ジョホール洲に出來て、勞働者の衞生、其の他の事に對する規定がある。其の規定を嚴守して、行かなければならぬ。まあ色々な監督上の事がありますので、これ等は皆、日本人がやつて居る次第であります。

大概想像せられる通り、エステートには社宅があり、倶樂部があります。私は南亞公司の倶樂部で泊まりしたが、實に夜は寂寞なものです。此處は御承知の通り、赤道に近いから、風が吹かない。吹いても木の枝を鳴らす樣な風は吹かない。夜は實に靜かで何んの音もしない。又其處此處に、虫の鳴き聲がするのは、やもりの鳴き聲です。其のやもりと云ふやつは、どこにでも家の中に居る。私はやもりは嫌ひですからそれには困りました。マレー半島のセランゴールの、コーランポ市のステーションホテルに、初めて泊つた時に、澤山のやもりが居た。サロンに行つて見ると、電燈に、多い處には四五匹位、少ない處でも二三匹居ります。やもりがどうするかと、其の擧動ばかり注意して居つた。護謨園に行つて泊ると、社宅の床の處には、何匹もぞろぞろ歩いて居る。それには閉口しました。どこでも蚊を追ふ液体を床に播き、やもり退治をやつて貰ひました。其の後ち、ジャバを旅行しても、何處を旅行しても、やもりが居るので困りましたが、段々に馴れて、それは人には、害をしないと云ふ事を、体驗しましたから、恐はくなくなりました。又ジョホール洲には虎が居ります。虎の話はよく聞かされました。又象も出て來ると言つて、恐はい話を聞かされました。シンガポールには、昔虎が譯山居りました。シンガポールが開けてから、最早百年にもなりますが、其の當初の統計には、一年に三百人位、殺された記錄があるとの事です。一年に三百人だから、一日に一人づゝ喰はれた位になつて居ります。シンガポールには今日は一匹も居らない。ジョホール洲には、虎は勿論澤山居るけれども、エステート

に出て來ると云ふ樣なことは、先づ稀れである。所が護謨園に行くと、盛んに虎の話を聞かされる。又皆が其の話を聞きたがる。十五年も、二十年もの間に出た事を、一塊りにして話すから、如何にも虎が多い樣に思ふけれども、そう虎は譯山出て居らない。併し南亞公司では、今年の四月二十七日に、虎を一匹打ち殺して居る。それは次の樣な次第である。

或る日、マレーの女が、虎が出たと云ふ事を、事務所に言ひに來たので、事務所では、そんな事はないと云つたが、併し狼狽して、三人ほど鐵砲をかついで行つた處、何も見當らない。暫らくして、開拓せずに僅かの範圍にジャングルを、殘してあつた所があつて、其處を目がけて行くと、四五間の處で、虎と顏を合はしたので、急いで思はず木の枝に上つて、命を拾つたと思つて居たところが、虎はジャングルの中に、入つて了つたのであつた。暫らくして、ジャングルから虎が出て來たので、三人が樹上から一齊に發射したら、虎は倒れた。やがて側へ行つて見ると、其の虎は既に、誰かに腹の處を鐵砲で打たれて居て、其處が化膿して、餘程弱つて居た事が分りました。

虎の產地ですから、時にはそう云ふ事もあります。併し先づ、虎の危險は今日ではないと言つてもよい位であります。エステートには、虎よりも恐ろしいのが象である。象は人間には害をしないが、護謨の苗木を、皆喰ひ切つて、非常な損害を與へますからです。エステートでは、一丈以上の高さの、非常に丈夫な垣がしてあります。それに又鐵條網が張つてあります。象は何時も一匹で來ずに、三四匹一團となつて出て來る。時として癪に障はると、其の垣を十本も二十本も、無慘に押し倒して了ふ。けれども鐵條網をして置けば、護謨のエステートの中に入つて來ない。だからエステートでは象を恐れて居る。

それから病氣では、日本人はマラリヤに罹り易い。それはあそこに棲んで居る蚊から傳染する。其の蚊は、溝水の樣な汚たない水の中に育つのではなく、綺麗な澄んだ水の中にわくもので。形は幾分普通の蚊より大きい。エステートに居る人は、蚊を防

ぐ爲めに、毛糸の厚い靴下を穿いて、仕事をして居る。マラリヤと云ふ病氣は、度々罹れば、終ひには罹つても輕くて濟むさうであります。けれども體力は、再々罹れば罹る程、幾分衰弱する傾向があるそうです。

熱帶に居る人は、兎角放縱な生活をして居つて、日本人と較べると、活發の度が鈍く、記憶の度に於ても違つて居る。どうも少こし低能者か、薄馬鹿に見えるのであります。これは一つは、氣候の所爲で、春夏秋冬がなくて、年中暑いからでありませう。大体に於て、マレー人は自身の年齢を知らないそうです。假令へば、自分は兄で、彼は弟であると云ふ事は、勿論知つて居るが、年齢をきいて見ると、兄の方が弟になつたり、弟の方が兄になつたりすることがある。

温帶地方では、樹木の樣なものも年輪があつて、十年經つてゐるか、二十年經つてゐるかと云ふことは、年輪を數へて見れば分ります。所が熱帶の樹木には、年輪がない。草木も年を忘れ、人間も年を忘れて居る。日本人にしても、熱帶に長く居ると、或る事件は、昨年であつたか、今年であつたか、目標の季節がないから、確的の記憶を呼び起すことが、困難になつて來ると申します。熱帶に居る日本人は、攝生を以て第一の條件として、テニスをやるとか、フートボールをやるとか、何んでも汗を一層搾り出す樣にして、元氣な生活をすることは、非常に必要であると云ふことです。柔弱な生活をして、涼しいこと計り求めて居ると、數年經たずして、日本人と思はれない程になる人もある樣です。私は學校に歸りますと、熱帶に働くことを希望する學生には、運動其の他の娯樂、音樂の趣味と云ふ樣なものを、大いに奬勵して居るのであります。森村男のエステートに行きまして、非常な經驗を得て來ました。

兎に角、南洋に於ける護謨は、非常に有望なものであります。が日本人は護謨に對しては、充分な分け前と云ふものを持つて居りません。地理からも、歴史からも、南洋に於ては、日本は英國にも、米國にも劣つてはなりません。尙ほ又日本人は支那人に及ばないと言いつて、悲觀するものがありますが、三百三十幾萬人の中、三分の一

以上の者は、支那人であります。其の支那人と云ふ者は、記錄に示す處に依れば、南洋とは二千年近くの交渉があります。日本人は事實上の交渉は、僅か四五十年の間にしかならないのだから、今日の狀態を、何等悲觀するに及ばないと思います。

シンガポールを去りまして、和蘭の船に乘つて、爪哇に參りました。爪哇ではバタビヤに、一番先に參りました、地圖を持つて參りませんでしたが。中一日で爪哇のバタビアに行きました。朝着きまして、十時頃にバタビヤのホテルから、自動車で、有名なブイテンゾルグ植物園を、見物に行きました。そこ迄は三十哩以上もあります。それからホテルで、一寸休息して、バタビアに歸つて來て、晝食を食べました。三十哩と云ふと、横濱から東京驛迄、二十哩に足らない十九哩ですから、可なりの距離です。そこを十時過から行つて、急いで見て來た。其の行く道は、坦々として砥の如くで、日本の樣に曲つて居らぬ。眞つ直ぐでなくても、變曲がゆるやかである。一時間に三十五哩位は、危險がなくて走れる。日本では、自動車は同じ事でありますけれども、そんなに走る事は出來ない。此の頃京濱間によい道が出來ましたが、二十五哩位出して走つても、直ぐ巡査につかまります。斯う云ふ土地からでは、自動車は中々能力を發揮することが出來ない。向ふでは道の兩側には、樹木が眞つ直ぐに植えてあつて枝葉が繁らせてありますから、殆んど並木の隧道を、通つて行くやうに見える。日本では街道には、余り並木がありません。あつた處で、所謂盤根錯節で、道路其ものと同じ感じがする。

尙ほ爪哇の方々を、見物して來ました。規那を產する處のエステートにも、見に行きました。どこに行つても道はよく、とても東京、横濱などの道路が、爪哇の樣になるのは、今から十年かゝつても、困難であらうと思ひました。そしてバタビアのホテル迄そう云ふ樣にして、六十キロ位の速度で走つて歸つて來て、食堂に入つて晝飯を食べました。驚いた事には、非常に澤山の給仕が後に居ります。客一人であれだけの給仕が後に居ると云ふ事は、王侯、貴人の態度であります。其の給仕が何人居るかと數へ

て見ると、十八人居りました。それは皆爪哇人で、頭は爪哇の更紗で包んで居る。上着は白い詰襟である。下には爪哇更紗の日本の腰卷の樣なものを穿いて、いづれも跣で居りました。十八人居りまして給仕しても、靴の音もしなければ、何の音もしないで、しなやかである。出る御馳走は何かと云ふと、初めの給仕は御飯を持つて來る。次の給仕はカレーを持つて來て、ライスの上にのせる。あとの十六人が何を持つて來たか順序を知らないが、一品宛持つて來る。魚の煮たもの、肉及鳥類、野菜のそうしたもの、唐辛、胡椒、色々な調味料まで一人一品、器を提げて十八人が持つて來る。其の後に、カフエーも果物も出る。實に食糧問題を云ふ日本から、爪哇に行つて見ますと、眞に幸福な感じが致します。此の宿はホテル・インデスと申し、有名なホテルであります。そして此の料理は爪哇では、ライス・テーブルと言つて居ります。

爪哇のホテルは、何處も大低同じ樣なものであります。私共の泊つた宿は、一人が使用する爲めに、三室も付いて居ります。初めの室は、ヴエランダで、庭に面して居

る。そこにテーブル、椅子などあつて、カフエーなどを、飲まれる樣になつて居る。次の室は寢室になつて居ります。洋服棚、洗面臺などあります。最後の室は便所と風呂場になつて居る。風呂場は白いタイルで拵らへ、栓をねぢると水が出る樣になつて居る。風呂と言つても水風呂で、バケツで其の水を浴びるのであります。頭にかけやうと思ふと、シャワーがある。一日に幾度でも其の風呂場に入つて、水浴が出來る樣になつて居る。其の水浴場にも、やもりが二三匹必ず居る。どうも裸で居る私を狙つて居る樣に思はれました。寢臺は馬鹿に廣い、直ぐにダブルベッドだなと考へられる。がそれはあながちダブルベッドと云ふ譯ではありません。どうして其の廣い寢臺が要るかと云ふと、暑いものですから、あつちへ轉がつたり、こつちへ轉がつたりするので、それで廣さが必要なのであります。それから何も被ぶるものがない。蒲團の代りに何が置いてあるかと云ふと、三尺五寸か、四尺位の茶枕が、蒲團代りになつて居ります。それは使用して見ると、眞に重寶なものであります。足の上に載せて見たり、手

を上に載せて見たり、腹の上に置いて見たりする。色々に工夫して、寢つく譯であります。で話を聞いて見ると、腹を冷やすといけないから、腹を冷やさぬ爲めに、此の長い茶枕を使ふと云ふことであります。朝は非常に早い。五時頃には、もうカフエーを飲んで居る人がある。其のカフエーはとてもうまい。爪哇にカフエーを飲みにだけ行つても、決して失望しない。こゝでは茶匙に二三杯のカフエーしか持つて來ない。それを砂糖と一緒に、コップの中に入れて、牛乳をそれに一杯入れて呉れます。日本のカフエーは、茶碗に一杯持つて來て、牛乳一匙か二匙位入れる、向ふは反對であります。カフエーは少なく牛乳が多い。そして其の味と云ふものは、何とも言へない程おいしい。歐羅巴大陸は、相當カフエーは發達して居ります。英吉利はカフエーのうまい處ではないが。日本に來るともつと惡い。日本も段々カフエーはよくなつた事を私は感じて居ります。けれども日本のカフエーは、とても話にならない。朝のカフエーを飲む事と、ライス・テーブルに付く事とは、爪哇に於いて愉快に感じたことであります。

尙ほ食物に就いて、お話しなければならない事があります。南洋の果物は非常にうまいと云ふことを、南洋通の人はよく云ふ。大谷光瑞さんを初め、其の他の人が非常に賞めて居る。マンガスチンなどは、果物の王だと云ふて居る。英國の女王の在世中に、之を献上する汽船の船長があつたら、莫大の賞金を送ると云ふことでありましたけれども、腐り易いので、女王は遂に、之を食べずに崩御せられたと云ふ事が、記錄の中に殘つてゐる。私は毎年メロンを作つて、其の味を味はつて居ります。メロンこそ世界一のうまい果物であると思ふ。又日本の柿も、世界一のうまい果物の樣に思はれるので、兎に角今回の南洋旅行には、是非果物の比較試食をして見たいと、樂んで居りました。以前にシンガポールに行つた時には、マンガスチンや、マンゴーの樣なうまいものを、西洋人が餘計食、つて腹を損はすのみか、その爲めに命を取られるものもあると云ふことで、威嚇せられ、命を取られては、大變な事であると思つて、こわ〴〵なが

ら、味はつて見たに過ぎなかつたので、充分の味が分りませんでした。今度は相當に年を取つて、人生五十年も遠くに過ぎて、今は釣りを取つて居るのであると云ふ考へで、何でもかまはないから、今度は食つて見やうと思ひ、シンガポール着早々、先づマンガスチンを腹一杯に食べて見ました。マンガスチンは小さい林檎位のもので、果皮は可なり厚く、丁度榴の皮の樣で、只色が異なるのみである。即ち紫黑色である。其の皮には、一種の色素を持つて居る。手にでも染まると、中々剝げない。爪哇更紗などを染めるに使ふ。それを手の平に載せて、兩手で壓迫すると、そう堅いものではないから、割れ目が出來て來る。これを割ると中には眞つ白い、併し形は蜜柑のふさの樣なものがある。これを食ふのである。あつさりした甘いものではあるが、日本の柿の甘いのに較べて見ると、柿にはとても及ばない。マンガスチンは清凉果物で、柿と比較は適當でないかもしれぬ。市場には種類は餘りない樣である。マンゴーと云ふのは、丁度バナナの長さ位あります。バナナよりは肥大で、色は、あゝ云ふ樣な黃色をして居る。中に一つ大きな種子がある。三枚にすると、眞中の部分に種子が殘る。よく熟したものは、やはらかいから、匙できれいに食べられる。それには、ぷんと一種の匂ひがして、少し脂が浮いて居る樣に感ぜられます。マンゴーの方がマンガスチンよりも、餘程味に奧行がある樣に思はれます。マンゴーを食すると、少し何物か後に殘る。即ち奧行があると云ふ譯で、マンゴーに特殊の最負者の、出來る譯かと思はれます。それでも日本のよい柿には、及ばないと思ひます。ジユリアンと云ふのは、可成り高い處に出來ます。大きさはマンゴーよりも、マンガスチンよりも大きく、五百目位あると思ひます。それに硬い刺が一面に簇生して居る。熟すると自然に地上に落ちるので、それが大變に美味しい。熟する頃には、其の木の下に、大勢立つて待つて居る。五百目もあるものが、落ちて來るのであるから、しばしば人を傷け、稀には人を殺すこともある。元來重大なる果物は、高い喬木にはない筈であるが、此のジユリアン丈けは例外で、全く造物者の惡戲である。此のジユリアンを割りますと、非常な

臭ひがする。此の大さの室で、割つて開いたならば、一箇で充分、室中非常な臭ひが滿ちます。腐つた玉子の臭ひだとか、腐つた葱の臭ひだとか、書物には甚だ上品に書いてありますが、ほんとうは、そんな臭ひでなく、便所の臭ひが致します。便所にも大と小との二種類ありますが、其の大の方で(哄笑)、とても鼻を撮まなければ、泰然として居られません。私はこれは食はなければ、話の種子にならないと思つて、味はつて見ました。厚い堅い皮の中には、白いビロウドの樣な肉が充ちて居る。手を入れて取ると、矢張り房の樣に分れて取れて來る。その一房毎に種子があつて、色は實に美しいが、柔かい觸感が甚だ氣持が惡い。私は頗る其の始末に往生しました。二度目には、觸感に驚かされて、どうも口に入れる事が出來ない。やつと目と鼻をつぶつて、口に入れたのでありますが非常に甘い。甘味にも色々ありまして、鑑定は充分出來ませんけれども、兎に角氣持のよい程甘いと思ひました。不幸にして此の臭ひと、醜い形のために、如何にうまい果物であるとは云へ、王侯貴人の食卓の前に、出ることが

出來ない事を、ジユリアンの爲めに惜まねばなりません。有名な進化論の元祖ダーウインと同時代に、ワレースと申す博物學者がありまして、南洋を非常に精細に研究しましたが、彼の著書中には、此のジユリアンを賞讃して、ジユリアンを食すると一種の靈感を起す。之を食する爲めに、東洋に航海するの價値ありと、述べて居る。私は此の記事を讀んだ時には、ワーレスと申す學者も、餘り上品な人の樣な感が致しませんでした。私は多年憧れを以て居りました熱帶果物も、決して思つた程、甘いものは有りませんでした。ババナア其の他、數種の果物を、試みて見ましたが、我々溫帶地方のものは、矢張一番よい樣に思はれました。

尙ほ爪哇を去るに付きまして、申上げたい事は、爪哇の人間は、實に柔和の樣に考へられました。マレー人は先程申上げました樣に、テーブルで十八人も給仕する者が居りましたが、何れも眞に行儀がよい。我々の前を通るにしても、丁寧にお辭儀をして通ります。戸外で爪哇の人を見ますと、眞に喧嘩口論などをして居るのを見た事が

ありません。香港に居る間、二度途中で支那人が、喧嘩口論をして居るのを見ましたが、爪哇では一度も見た事がない。斯樣な柔和な人間を、治めて居ると云ふことは、和蘭政府は眞に仕合せであると思ひます。此の間爪哇に、騷動があつた樣に聞きましたが、これはまあ何國も同じ、時代の世相です。兎に角爪哇の人間と云ふものは、非常に柔和なものであります。何れにしても、和蘭政府がこれを治めて居る其の殖民政策は、立派な手腕であると思ひます。爪哇は小さな島である。日本の本土の三分の一かそこらであります。そしてその中に三千七百萬の人間が居る。和蘭の本國は、日本の九州のそれよりはまだ小さい位な國で、其の人口は七百八十萬人で、八百萬人に足りません。和蘭は爪哇を中心として、スマトラ、ボルネオ、セレベス、ニューギニア等、本國の約六十倍に近い面積の、殖民地を有つて居る。爪哇の人口三千七百萬人を主體として蘭領印度の總人口は、約五千萬人あります。七百八十萬人を以つて五千萬人を支配して居る。勿論爪哇が中心で、ボルネオ、スマトラ、セレベス其の他には、餘り人が居ない。開けて居る處は、大なる河の兩岸の一部分位である。但し爪哇は到る處開けて居る。爪哇は何故に中心になつたかと云ふと、此處は古い文明をもつて居る。即ち二千年以上の歷史をもつて居つて、其の建設した文化も亦驚くべきものがある。其の文化の具體的に殘つて居るものに、ボルブドーの佛跡があります。これは幻燈でお目に掛けますが、非常に立派なものであります。其の規模は、印度にも斯かるものはない位で、これは紀元七世紀か、八世紀頃の建設物で、これに依つて爪哇が、千二三百年前に、既に如何に開けて居つたかと云ふ事が分ります。四百年前に歐羅巴人が、東洋に來て交通を開かうとした時に、其の人口も多く、且つ既に文化した爪哇と、一番先に接觸する樣になつたことは、全く自然の事であります。それが又今日の樣に開けて、南洋の中心になつた所以であります。そして和蘭政府が、今日の地歩を占むるに至つたに就いては、幾多の困難を經て來たことは、爪哇の歷史を見るとよく分かります。和蘭は又本國の人間を、九千人程連れて來て、官吏にして居る。官吏には十年あそこ

で務めると、二年間の休養を與へて、本國に歸す。春夏秋冬のない處で、薄馬鹿になるのを防ぐ爲めに、本國に歸つて、身體を休ませて來る。旅費其の他を給與し、給料も半額を支給する。一年の休養でよろしいと云へば、旅費其の他を支給し、月給は全額を支給する。到る處立派な官宅が出來、色々設備が出來て居る。廣い屋敷を取り、其の庭園内には、大木を繁茂させ、彼等の生活を愉快にして居る。本國に歸つて、長屋住ひをするよりも、殖民地に留り、そう云ふ立派な生活をする事を以つて、滿足する樣にして居る。そう云ふ處は、政策がよく行き届いて居る樣に考へられる。爪哇の人口や、其の他の統計は、決して杜撰なものではない。九千人の官吏の外に、土人の官吏もあつて、萬般に渉つた統計を取つて管理して居る。

段々長くなりますが、尙ほ暑さの事に就いて、一言致して置きます。南洋から歸つて來る人は、屢々南洋は涼しい、よい處であると言ふが、私は涼しい處とは思ひません。自身の寒暖計を以つて、調べて見ましたが、晝は九十度を越えた事はないが、夜と

雖も八十度を下ることもない。これは勿論高い處でなく、海岸近くの低い平原の事である。八十度から九十度位の間ならば、決して暑いと云ふ譯には行かない。旅行した人はホテルのヴエランダで、カフエーを飲み、風呂場に行つて水を浴びる。食堂に行つてライス・カレーを食べる。そして外出には、並木の隧道の中を、自動車を驅つて行けば、別に暑くはないでせう。併し日中に街道を徒歩して見ると、とても暑くて一哩二哩と容易に歩けない。太陽の直射する間は、百度や百二十度はあるでせう。夜ならば兎も角晝は暑くて歩けません。日本では今年は、九十六度から、九十七度に上りましたが、一日中の最高の時間は短かい。日本では九十七度位の時でも、川に飛び込めば六十度内外の水であります。南洋の爪哇は海に飛び込んでも、八十幾度位でありますから、何處にも行き樣がない。夜も晝もない。そう云ふ樣な温度で、春夏秋冬殆んど區別がない。如何にも我々は大量の熱でもつて、壓迫されて居る樣な感じがする。贅澤な旅をすれば、そう汗をかかずに行つて來られる。然し山中は別であるが、平原で勞

役でもするとせば、容易ならぬ暑さである。此の暑さと、それからそんなに甘くない果物、また、やもりや何か居る其の場所、色々考へると、南洋と云ふ處は、或る人の考へる樣に、決して世界の極樂とは思へない。

歸りにスラバヤから、南洋郵船の船に乘つて、セレベスのマカッサーと云ふ處に行き、其處を見物して、次にボルネオのバリクパパンと云ふ處に行きました。此處は石油の大工場のある處であります。其の精製法が大變進歩して居りました。此のバリクパパンを出まして、北へ北へと歸つて來ました。赤道地方は無風帶である爲めに、毎日よい航海が續きました。南洋郵船の小さな船だけれども、海は油を流した樣な靜けさであります。船は大抵九哩位の速さで走つて居ります。遲いには遲いが、陸に居るのと違はぬ樣に、滑かでありました。バリクパパンを出て、赤道は其の日の夜中の十二時過ぎに、通過したのであります。汽笛が長く鳴つた。今赤道を通過して居ると云ふ知らせであります。が赤線も引いてなければ、何等變る處がない。聊かくだらぬ氣がしました。それで赤道を通過して、何か記念にと思ふが、何も記念にするものがない。デッキの上に出て見ましたけれども何もない。それで小便でも記念にしろと思つて致しました。そしてまた寢床に歸りました。ボルネオの島を離れて、マニラに來ました頃、海が大分荒れました。十月七日の正午から荒れて、これが翌日になると、北進した低氣壓が、亞細亞大陸の高氣壓の爲めに遮ぎられて、八日も九日も十日も荒れて、デッキの上はまるで池の樣になつて了ひました。それは赤道の上で、小便をしたから、海の神樣が怒つて、こんなに荒れるのである。此の責任はお前にあるのだと、同船の人々から言はれました。兎に角四晝夜と云ふものは、荒れて居りましたが、何んでも此の船が出來てから、第三番目の難航海であつたそうです。十二日の朝には兎に角、香港に着くと云ふことになつて居つたが、十一日の二時頃になつて、目の前に香港が霧の中に顯はれて、面喰つた次第で、其れ程の難航海であつた。それで船客の大部分は、香港で天洋丸に乘換へました。私も乘換へる樣に勸誘せられたのでありま

すが、矢張り同じ船で歸つて來たのであります。

私は商賣や見物にのみ、行つたのではないのであります。南洋宣傳の爲めに、視察に行つたのであります。而して南洋の歸りに、南洋通ひの船に乘り、危險だと云つて外の立派な船に乘つては、青年に南洋に行けと言つて、奬勵する勇氣が無くなつてしまひます。まあ船と運命を共にする覺悟で、安心して航海を續けました。無事で門司に歸つて來たのは、十月の二十二日でありました。肥前の五島附近を航海する時、初めて日本の山河を見ました。天には一点の雲もなく晴れ渡つて、秋の小春日和に、五島の島々を見れば、山の形、水の色、實にうるはしい。南洋のそれよりは、尙ほ一層立派でうれしかつた。南洋から歸つて、こちらが嬉しいと云ふことで、どうして南洋の宣傳が出來樣かと思ひました。誰でも故國に歸つて、嬉しく感ぜぬものはありますまい。愛國心の然からしむる處である。併し同時に又これが愛國心の全部ではない。熟ら世界の物質文明の狀態を考へて見ると、其の文明から試みに護謨と云ふものを取り

去るならば、どれだけ文明に欠陷が生ずるかと云ふ事を、考へて見ますと、容易ならぬ事が出來ませう。其の護謨は全產額の九割以上を、歐米に出して居る。我が國の干渉する處の量は實に少量である。猶ほ護謨の外、耶子油、オイルバーム油、カフエー規那、砂糖など、南洋に產するものは、實に夥しいものがある。皆今日物質文明の資源をなして居るものであります。爪哇の外ボルネオ、スマトラ、セレベス等には、未だ未墾の土地が、非常に澤山あります。日本の人間が三倍あつても、五倍あつても、まだまだ廣過ぎる面積が存在して居ります。即ち無限の土地と、無限の資源は此の南洋に存在して居ります。而してこれを地勢上から考へて見れば、和蘭の南洋に於ける、亞米利加の南洋に於ける、又英吉利の南洋に於ける狀態よりも、日本の南洋に於ける方が、遙に優れて居る。日本の手は南洋に、延びなければならぬ樣になつて居ると云ふことは、地勢を見ても、歷史を見ても分り切つて居ることである。而して此の南洋は、今まで申しました通りに、和蘭、英吉利が西から進んで居ります。亞米利加が東から

進み、支那と日本は北より進まんとして、其處に勢力の十字架―クロッス―が生ずる樣になつて居ります。

此の蘭領印度、又廣く此の南洋方面は、日本に取つては、實に死活の問題である。人口問題、食料問題、工業原料問題、總ての問題の死活の一つは、正にこの方面に存在して居る。之れを何う云ふ樣に、切り開らいて行くかと云ふことは、日本の政治家のみならず世界全般の深甚の注意を、拂つて行かなければならぬことであらうと思ふ。歐米の勢力は東西から、支那と日本は北から、共に此の方面に注がれて、そこに勢力の十字架が出來て居る。此の十字架は實に昔から、外交上に於ては頗る危險視せらるゝものである。病人にしても、溫度の上つて行くカーヴと、脈の上るカーヴとが並行して居る間は、熱が三十九度にならうと、四十度にならうと、決して危險狀態ではない。併し溫度が下つて來て、脈が上る樣になると十字架を作る。これは所謂死の十字架である。南洋に於て此の如き死の十字架が、存在して居ると云ふことを、我々は忘

れてはならない。國際聯盟が何うであるとか、人類の平和が何うであるとか云つても、勢力の十字架、死の十字架を、我々は忘れてはならぬ。充分に之れを研究し、且つ注意を怠つてはならぬ。而して同時に南洋に向つて、我々日本國民が、發展して行かなければならぬと云ふことは。日本人の使命であると覺悟すべきである。此の年の寄つた私が、かう云ふ不恰好な風體を以つて、暑い處へ何をしに行つたか。それよりは溫泉にでも行つて、浴衣がけで、團扇でも使つて居た方がよいが、何が故に暑い處へ行つたかと云ふと、私の背後には、我が校千有餘の、日本の使命を背負ふべき青年が居る。其等の青年が私を南洋へ送り出したと私は考へて居る。私は又一つの學校としてでなく、國民としては私の背後には、六千萬人が居ると云ふことを考へ、そしてこの南洋に發展すると云ふことは、國家の使命、國家の運命、又我が國に對する神の攝理とでも云ふべきものであると言ふ信念を、私は持つて居る。斯くして私も亦運命付けられて南洋に行つて來たのであります。

（拍手）

新島先生を憶ふ

綱島佳吉

上州の伊香保溫泉に、千明といふ旅館があつて、此處に新島先生の手紙の一つを軸にして、床に掛けて居るが、それは先生が、明治二十一年頃に書かれたものと思はれる。當時同志社大學の設立を、天下に發表して、各方面より寄附を促がされた先生は知人であつた此の旅館の主人にも、この事を頼まれて『どうか寄附金募集に盡力して貰ひたい。尙ほ旅客の中に、錚々たる人を見たならば、それにも勸誘して呉れ』との依頼狀である。そしてその手紙は、先生の描かれた繪と、一緒に軸になつて居るのである。

先生は繪も巧みであつたが、この繪は伊香保から、上毛連山を眺めた處を麗はしく

描寫したもので、この繪の上部には、勝海舟翁が

江山如有待更無私

といふ賛をせられて居る。私はこの賛は、如何なる意味であるか。又どういふ譯で、海舟翁が、先生の手紙と繪を見て、賛を書かれたのであるかを知らないが、旅館の主人の語るところに依ると、軸の由來は次の通である。

先生が逝かれて後ち、この二つのものを所藏して居た主人は、或る機會を得て、勝先生に賛を乞ふた。そしてそれを軸にしたのである。『江山如有待更無私』といふ意味が、始めは判らなかつたが、色々考へる内に、一つ思ひ出したことがある。それは新島先生を、最初に勝海舟に紹介したのが、津田仙翁であつて、その時の事を、津田氏から聞いたことがあるから、成るほど、斯ういふ意味で勝海舟が、新島先生の人と爲りを、咏つたものではあるまいかと、自分自身に解釋した譯であるが、若し違つて居つたら敎へを受けたいと思ふ。津田氏が先生を勝海舟に紹介した時に、先生が學校の

の事や、將來の希望等を、話されたのを聽いて、勝海舟は『あなたは眞に善い事をなさるが、幾年位したらば、成功する見込がありますか』と問はれた。海舟翁は初對面の人に一二の問題を投出して、その返答の仕工合に依つて、その人の價値を見透す人であつた。それで先生に、前のやうな問題を出された。ところが先生は『いゝえ、私は自分の生涯の中に、自分の仕事を成功しやうとは思つて居りません。自分はやるだけやります。私の死んだ後とで、私の志を繼いで呉れる人があると思ひますから、私はこの事業を、私の生涯中にやり遂げやうとは毛頭思つて居りません』と答へられた。その後ち海舟翁はこの時の述懷を、津田氏に洩らされて『先達君の連れて來られた新島と云ふ人は仲々偉い人間である。彼はきつと仕事をする人だ。そして誠に綺麗な私の無い人である』と賞讃されたと、津田氏の口から聞いた。これ等の話の中に、其の賛の意味が讀まれるやうに思ふて、私は斯う解釋した。勝海舟が、先生を偉い人だ。實に綺麗な人間だと賞められた。殊に大事業を企てて居る人として、珍らしい綺麗な

心を有つて居られる。どうしても、これは自分がやらなければならぬと考へて、又それを自分の生涯中に、成功しやうとも思はれない。その麗はしい心持に、深く感じて前のやうな賛をせられたことゝ思ふ。先生は一面非常な精神家で、慷慨家で、愛國者で、心の中に火の燃えて居るやうな質に偉い人であつた。是れに違ひない。

元治元年六月十四日の夜半、先生は國禁を犯して外國船に投じて、亞米利加に行かれた。其の時の歌に

武士の思ひ龍田の山楓
錦着ずして歸るものかは

といふのがある。先生は、當時二十一才の血氣盛んな時代であつた。苦學十一年の後ち、明治七年に歸朝せられたが、その時の述懷は

故郷に飾る錦は匣の中
世に示すべき時にあらねば

とある。出發の時には、錦を着ねば歸らないと、武士の氣を吐いて、大いに爲すあらんとした先生が、十年後には、故郷に飾る錦は匣の中に祕めて、世に示さぬことを咏つて居られる。

永への眠りに就かれた明治二十三年の元旦の詩は、次の通りである。

送歳休悲病羸身　雞鳴早已報佳辰
劣才縦乏濟民策　尚抱壯圖迎此春

病める身でありながら、尚ほ斯ういふ一つの考へを、胸に懷いた愛國者といふ風が見えて居る。愛國者、慷慨の士である先生は、所謂普通の愛國者、慷慨家、一般の人の稱へる精神家とは異り、神を信じ、その攝理を信じて、その惠みの中に生きて、神の事業に參加するといふ、極めて明らかな信仰の上に立つた、クリスチャンであつた。

惠みある君が情けの言の葉に
枯れし梢も花咲きにけり

といふ信仰の歌があるが、今日斯くあるは、全く神の恩惠によるといふことを感じて咏はれたのであらう。枯れた梢に花が咲いたとは、實に謙遜と感謝の言葉である。

私は幸にして、長く先生に接した者であつて、明治八年の春、未だ同志社の設立されない時に、不思議に先生に大阪で會つた。その時は唯會つたといふだけで、別に話をしたといふ譯でもなかつたが、それから二年後に、先生の設立された同志社に入學したといふことは、實に不思議な緣故である。長く先生の膝下に座して、色々の話を聽き、又たび〳〵先生の心の底を叩いたこともあるが、先生は何時も神の惠みの中に生きて居るといふことを、その言葉にも、行ひにも現はされた。

同志社では毎朝禮拜があつて、教員生徒皆一堂に集り、神を讃美し。祈禱を捧げて後ち、各々別れて、その教室に入つたものであるが、深く雪の積もつた或る朝の禮拜の時、先生の御話に『何時も來る途で色々な汚いものや、穢れたものを澤山見るが、今朝は凡てのものが雪に覆はれて、悉く美化され、非常に綺麗であつた。人間もそれ

と同じく、汚れもあり、缺けたところもあり、罪もあるものであるが、神の惠みに覆はれると、丁度雪が有ゆる汚れを包んで、世界を淨化するやうに、潔く、麗はしくせられるのである。これを思へば、神の惠みの尊さを感ぜざるを得ぬ』といふ意味のことを語られた。別に新らしい思想でもなく、珍らしい話でもないけれども、其の時の先生の敬虔な態度や、深刻な言葉が印象されて、今尙ほ髣髴として眼の前に現はれるやうに思ふ。このやうに先生は、何時も神の恩惠を感謝し、信仰に生きた人であつた。

『江山如有待更無私』と、海舟翁が言はれたやうに、日本を救ひ、神の王國を建設する爲に、人間を作るといふ大事業を、企圖しつゝあつた先生は、一面に於て、實に私の無いクリスチャン・ゼンツルマンであつた。この心を以つて同志社を創立し、經營されたのであるが、この事業は自分一人では出來ない。多くの同志を得て、日本の精神的改革に當りたい。その爲には眞の人を作らねばならぬといふ考へから、教育事業を割出されたのであると思ふ。

先生は又實に涙脆い人であつた。浮田和民君が嘗て『先生には涙德がある』と書いたことがあるが、先生の御話の最後のコンクリュージョンは、何時も涙を以つて結ばれた。先生は學生を非常に愛せられた。恰も親が其の子を愛するやうに愛せられた。子供が良く出來るといふことは、親の爲に無上の喜びであるが、若し脱線すれば非常な苦みを感ずる。然しその苦みの中に、深い愛を現はすのが親心であるが、先生は實に此の尊い親心を以つて學生を愛された。先生の尊い愛の現はれは數多あるが、忘れることの出來ないのは、或る時同志社で盗難事件があつた。初めての出來事であつたので、朝から晩まで大騒動をした事を記憶する。私は其の取調を命せられた一人であつたが、調べて行く中にとう〳〵犯人が判つた。先生に報告しなければならぬといふので、同級生の上原といふ者と一緒に、朝早く先生の門を叩いた。先生は未だ寢て居られたが、間も無く起きて來られて、私達の報告を聞き、その犯人を知つて非常に驚かれて、『彼れがしましたか、彼れが、彼れが』と言つて、自分の信じて居た學生が、當の犯人であつたことに、大變心を痛められた。これを見た私達は『あゝは言つたが、どうも困つたことをした』と思つた。それ以後私はめつたな事を、先生の耳に達してはならぬと考へた。同志社でさうした不都合な行のあつた者は、追放してしまふといふのが、普通の取扱方である。然し先生は人間を第一に置いて、非常に深く考へられた。

明治十八年十一月に、同志社創立十年の記念祝賀會が催された。私は既に卒業して牧會に從事して居たが、其の時は各地から多くの人が集つて來て、非常に盛會であつた。詩や歌の披露、演説などがあつて、その最後に先生は『今日の同志社が十年の歴史を有つ祝ひの日に諸君と會して、其のお話を聽き、十年の歴史を顧る時に、實に感謝に堪えない。諸君の盛んな演説を聽いて居る中に、一つ今日記念しなければならぬものが茲にあることを考へた。それはこの十年間に同志社の校則を犯して、追放された數名の學生のことである。彼等は今、何處に居るか、將來どうなるかと思ふと、可

哀想で心配でならぬ。折角此處に入學して、卒業もしないで、退校された落伍者の爲に私は記念する』と云つて壇上で泣かれた。

學生の中で、成績が良くて將來有望な者には、先生は何時も喜んで接つせられたが同時に弱い者の爲にも、心を置くことを忘れられなかつた。

明治十二年の同志社最初の卒業生中に、山崎爲德と云ふ人があつた。これは水澤藩の人で、當時の縣令安場氏が、特に前途有望な青年を選拔して、勉學させた中の一人であつた。他の二人は後藤新平、齋藤實氏の二人で、三人共年齡も殆んど同じであり非常な秀才であつたが、就中、山崎君は特に優れた學才があつて、始め熊本の洋學校に送られたが、後ち帝國大學に移り、卒業間際の明治十年に同志社に移つて、十二年に卒業したのである。同期に卒業した森田久萬人、市原盛宏氏と共に、選ばれて母校に教鞭を執ることゝなつて非常に望を囑されて居たが、惜しいことには肺病に罹り、職に在ること一年半の後ち遂に永眠した。その葬式の時に先生は說敎せられて『この人が亡くなつたので、自分は實に両腕をもがれたやうな心地がする。中途でこの人が逝つてしまつたのは』と言つて泣かれたが、山崎君をして大に働かせやうと、思つて居られたのに、中途にして斃れたのであるから、悲しまれるのは當然であるが、惜しい人間を失つたといふ普通の人情以上に悲しまれたことを見た私は、その時の光景を今も尙ほ忘れることが出來ない。

要するに先生は、非常な精神家で、愛國者で、火の燃えるやうな人であつたが、又愛の人、謙遜の人であつた。神を信じて、自らは神の事業に參加するといふ確固とした信念の上に立たれた人である。同志と共に、日本を救ふといふ目的を以つて建てられた同志社は、志を同ふする者の集合であつて、業を同ふする者の團体ではない。政治家もあれば、牧師もあり、敎育者もあれば、實業家もある。即ち各方面に有爲の人物を作ると云ふのが、同志社の目的であつた。

回顧すれば、先生逝かれて三十八年、享年四十八才。四十八才と云へば、比較的若

いのである。一昨日の國民新聞に、德富蘇峯君が『新島先生は四十八才で逝かれた。先生御存命ならば、今年は八十五才になられると思ふ。八十五才で働いて居る人も少くないことを見て、先生は壽命に貧しかつた』と書いて居るが、私も同感である。然し先生は自ら信じたところを一貫して、その使命を遺憾なく果された。

考へて見ると維新前後、國家の爲めに働いた人々の多くは早世であつた。木戸孝允は四十四才で逝き、大久保利通は四十九才で斃れ、大西郷は五十二才で他界した。安政六年に幕府に捕はれて處刑された橋本左内は廿六才、吉田松陰は三十才であつた。先生は豫ねて『私は疊の上で死なうとは、思つて居ない』と屢云はれたが、先生は主義の人で、主義に斃れた人である。

主義と立ち主義と斃れん我が身なり
浪華の夢の世にしあらねば

とは、先生の心事を、遺憾なく發揮した歌である。

今日の記念會には、我が母校に於ても色々な集會を催して先生を偲び、同志社スピリットを發揮する爲めの企てのあることを耳にするが、我等同窓の者も此處に集り、先生を追憶して、新たに同志社スピリットを喚起し、力を協せて國家の爲めに、神の國の爲めに努力せんことを、切望して止まない。（拍手）

新島先生より受くる感化

松波仁一郎

今夕は、私共が先生より受けました感化の事を御話し致します。主として自分自身の體驗したお話をする方が、間違がない樣に思ふ。但し自分の事になりますと、自然と云ひ過ぎる樣なことがあるか知りませんが、其處は豫め御諒察を願つて置きます。

先生は明治八年の頃、同志社英學校を設立せられ、同十八年には、十年の記年祭を催されたのでありますが、私は其中間、即ち明治十四年に同校に入校し、同十九年に卒業致しましたので、實に今から四十一年前の事になります。其處で、今或お方から「貴君の卒業した時には、何人一緒に出ましたか」と問はれましたが、一寸お答へし憎い。形式から云へば、其の年の卒業者は、僅かに二人であります。只今京都の商業會

議所に居られる松尾音治郎と云ふお方―當時は川本君と云ひましたが―其の人と私の二人でした。然し五年生として、殆んど卒業間際と云ふ時迄は十五人であつた。其の中には廣津友信君―當時は友吉―や、亡くなつた池内德孝、中川虎次郎君なども居りましたが、色々の譯で、其の中の十三人は學校を出て了ひました。重なる原因は、外國教師と意見が會はぬからであつて、それが爲めに、諸氏は惡く云へば學校を脱走したのです。これに就ては、新島先生も非常に驚かれて、色々說諭されましたが、何分血氣の盛んなときで、どうしても聞かないで、已むを得ず松尾君と私と二人だけ、明治十九年六月××日彰榮館の卒業式場に於て、卒業免狀を受けた譯であります。

私共の入學當時の、明治十四年から卒業の時の十九年頃までの數年間は、同志社の歷史に於ても、最も盛んなる時代の一つで、同志社精神の充實した一つの黃金時代であつたといふことです。學生の數も少ないから、學生各自の連絡も好く行き渡り、又學生と教師との間も親密であつた。夫れで新島先生から學課の教授は受けなかつたが

先生に接觸する機會が多かつた爲め、其の受けたる感化が、自から他よりも深い譯であります。其の感化の源泉たる先生の美德に就ては、到底短い時間に悉く申上げられませんから、其の中の數者を擧ぐるに止めます。

先生の物事に御熱心と云ふ事は、諸君も御存知の事で、何事にも現はれます。殊に德育を主とする教育を、盛んにすると云ふ事に御熱心であつた。而して同志社英學校は、其主意にて立てられたのであるが、決して普通學校に止めず、必ず大學程度迄引上げねばならぬ、日本の大學は官立だけでは足りない。又官學だけでは良くない。どうしても私立の大學をも作つて、精神教育をしなければならぬと信じて、熱心に其の實行に從事せられ、私は深く其の熱心に感じたのであります。夫れが爲め、度々東京に來られて奔走せられる、又前のお方が御話しになつた通り、基金の募集の爲めには、田舍の宿屋の主人にまでお賴になる。又外國へも行かれるといふ樣な譯である。仍つて此の御熱心を見て、我々も默つて居られないので、應分の微力を盡した。先程も申

す通り、私は明治十九年に同志社を卒業しましたが、其の翌月直ぐ東京に來つて、九月に大學豫備門に入學願書を出し、試驗の後、改名せられた第一高等中學に這入つたのでありまして、其の在學中でありますが、及ばずながら僅かな事でも致し度いと思つて、高等中學校の學生中から、寄附金を募つた。其の時には、同じく同志社卒業者たる村上直次郎君とて、今美術學校の校長をして居られる人にも、助力して貰ひました。寄附金は十錢以上と云ふ事である。小額なれども四十年以前の事であるから、今の一圓以上になるかも知れん。今でも覺えて居りますが、前宮内次官の河村金五郎君や、今の日本銀行副總裁土方久徵君なぞは、一圓出して呉れたので、非常に金持だなと思ひました、何でも總額二十八圓三十錢程集つたと思ひますが、私はそれを持つて先生の御旅館へ行つた。

それは明治二十二年の十一月四日の午前十時頃でありまして、旅館は京橋區秀英社の前の成瀬と云ふ宿屋であつた。先生の同行者たる長岡と云ふ祕書役の樣なお方に會

つて、先生に御目にかゝり度いと云つた處、今來客中だから少し待つて呉れと云はれ待つて居ると、客が程なく歸へつたから、先生に面會し「實は先生が大學設立の御計畫中と、聞きましたから萬分一の御助けにもと思つて、我々は金を集めて云々」と云ひ出した話の最中に、先生は「之から一寸、湯淺君の所に行くから待つて下さい」と云はれた。夫れも考へて見れば、大學設立の用件であつたらしい。夫れで私は長岡君と二人で、晝の食事をすませて待つて居り、先生がお歸りになつたから、今の話を續け「斯々云ふ譯で、僅かの金でありますけれど、どうかお納めを願ひたい。私は今官立學校に這入つて居りますけれども、決して同志社の事は忘れません。其の謝恩の意味と、先生の御熱心に動かされて集めたのでありますから、若し大學設立費用の萬分の一にでも、御使用下さいますれば」と云つて御渡した。其の際尙ほ詳しく大學設立の事を伺ひまして、前に想像して居つたよりも、御熱心の大なることを感じた。「斃れて後ち止む」と云ふのは、こう云ふものであらうと感じ、後ち自ら事を處する際に

熱心の度が足りないときには、常に先生の事を想ひ出すことにした。

先生の物事に御熱心なるは、以上の如くにして、我々は其の感化を受くること、前述の如くでありますが、而し考へて見ると熱心といふものは、隨分澤山の人にありまして、それ程驚く可き事ではない。小說を書く人でさへも隨分熱心に寢ずにやる。書家の中にも熱心にして、殆んど精神が狂ふ位にやる人もある。又實業家の如きすら、往々死者狂ひになつて、勉强して居る者が多い。澤山金を儲ける位の人は、實に儲け仕事を熱心にやります。政治家にしても亦然りで、人に何と云はれてもやる。何程惡く云はれても至る所で怒号したり、又晝夜奔走したりする。夫れは當然のことである。熱心にやらなければ立派な繪は書けず、良い政治家にも、良い小說家にもなれず、又金儲けも出來ません。けれども先生の御熱心は、所謂實業家や、政治家の熱心と違ひ純潔なる誠心誠意に充ちて居る。それは無論美術家にも誠意がある。又實業家にも政治家にも誠意はありませうけれども、露骨に云へば大多數は自分の爲めにやる。實業

家は自分に儲け樣とし、政治家は自分に權勢を得樣としてやつて居るから、先生の如く全く誠心誠意、世の爲め、人の爲めにやるのとは大分違つて居る。先生には誠意が滿ちて居る樣に思はれました。

又先生は、所謂溫情なるものの持主であらせられた。兎角熱心とか、誠意の滿つる者は、頑固に成り易く、溫かい美しい情が欠け、又は偏狹になり易いものであるが、先生には夫れがない。先生は宏量と云はふか、大度と云はふか、實に度量が大きい。決して人を憎むとか、毛嫌ひするとか、恨むと云ふ事はなく、即ち淸濁併せ呑む丈けの大きさがあつた。普通の道德家は潔癖に過ぎて、人を容れられない傾きがある。あの人はあんな事をするから駄目だとか、何んだとか云つて、忽ち退け樣とするが、先生は廣く多くを容れて、段々感化して行かれる。先に申しました私の同學生、十五人中の十三人が、卒業間際になつて去り、即ち先生に背いたのであるから、普通の人ならば「彼等は實に怪しからん奴だ。隨分背恩の者だ。之れ丈け世話したのに、自分に

默つて去つて了ふ、そう云ふ者はどん〳〵出して了へ」と云ふ樣になり易いが、先生はさうでない。此の脫走を恰も我身の失策の如くに考へられ、自分が不德であつたからこんな事になつたのだ。實に行屆かなかつたと思はれ、決して彼等を憎まず、何んとかし度いとて、色々說諭せられ、一度說諭して聞かねば二度、二度で駄目なら三度と云ふ樣にして、何度でもせられたから、十三名の者は到々先生の度量の大きいのと其の誠意に動かされて、同志社に復歸し、形式上私共よりは、二年遲れて卒業して、學業を全うした譯であります。

私一個としても、實に先生の宏量を體驗して居ります。私は才の足らぬ鈍い者であり、殊に先生の說に、反對のことをも主張することがありますが、學校に敎師の足らない所から、助敎に採用して下さつた。又偏屈な議論を述べ、頑固のことを云ふときは、諄々と說いて、如何にも分る樣に導いて下さつた。其の度量の大きいのには、常に敬服と申しますか、有難いと申しますか、決して忘れは致しません。同志社を卒業し京都を立つて、東京に參ります時、お邸に上がり「先生の御寫眞が戴き度い、私もつまらないのですが、置いて參ります」と申上げた所が、先生の御寫眞は、其の時になかつたから、後ちに手紙を添へて御送り下さいました。其お手紙は英語であつて

Kyoto, July 4th, 1886,

Mr. Matsunami,

Dear friend,

I am much obliged to you for your giving me a new likeness of yours just before you left Kyoto. According to your request I will hereby send you one of mine, I hope you will work out your way boldly, manly and successfuly.

Yours truly,

Joseph H. Niisima.

斯う云ふ御手紙で御座いました。其の時戴いた御寫眞は、丁度此所(同志社倶樂部)に掛けてある引延ばし寫眞と同じ型であります。先生の御寫眞は一つしかないのか、此の額のと同じ樣に思ひます。斯う云ふお手紙で『しつかりやれ、思ふ所を十分やれ「boldly, manly」男らしくやれ』と云ふ御奬勵の御手紙であります。私は之れを寶物とし、自分に女々しい心か、又は遲疑する考が起ると云ふと、此の御手紙を出して、自ら注意するのであります。此れは私一身の事でありますが、必ず諸君の中にも、斯う云ふ事があらうと思ひます。學生や卒業生の數が大勢になりますと、一々此んな事は出來難くならうけれども、而し先生は皆々に、出來るだけの事はして下さるお方である。

尙ほ先生のことにして、私の心に深く感じたことは、其の平等主義「Equality」、人により無益の差別を、付けられなかつた事である。當時の岩倉公、木戸公、森有禮卿の樣な大臣、參議の方々、今より四、五十年前の官尊民卑の時代には、大邊な勢であ

りましたが、斯う云ふ顯官に御接しになる時も、決して過ぎたる禮はなさらず。而して一方には、又田舍出の書生、洋服も着た事なく、洋食も食つた事がない者にも、我が友と呼ばれ、決して言葉だけでなく本當に「My friend」と云はれる。又同志社の小使や、賄夫の五平君とお話になる時にも、友人間の如くに分け隔てなく、心置きなく話して居られる。再言すれば、非常に社會的位置の高い顯官に接する時も、學生や小使、賄夫などに接する時も、先生の動作には變りはない。固より官位ある人には、官位相當の禮節を守られるが、心の內には夫れ等の人々と學生の間に、人間としての分け隔てがない。之れは余程難かしい事で、私等も大に氣をつけて居ても、やり損ふ事があります。何となく、相手の人によつて區別をつける傾が生ずる。大低の人はさうである。勞働問題を取扱つて、勞働は神聖なり、皆同等であると言つて居る人、私の知つて居る勞働問題の巨頭の人々は、常に勞資の關係をもつと良くしなければならぬ、何人でも同等に待遇せねばならぬと、叫んで居る人々の中でも、土方とか、車挽

に接する擧動、若くは對人的心情と、公侯爵等の貴族に接する擧動や、心持ちとが違つて居る樣である。局外から見ても、どうも違ふ樣に見える。今晩は何某侯爵から、晩餐に招かれたとか、今日は三井の茶話會があるから、行かねばならぬと云ふ場合の心情と、車屋がどうした、土方がどうしたと云ふ場合の心情との間には、どうも人によりて、余程區別をして居る樣に見受けられる。卽ち勞働黨の首領とか、平等派の首領株とかいふ者の中にすら、人に對するやり方が、相手の身分に依つて違ふ樣に思はれ、何々侯爵、何々富豪の茶話會に行くと云ふ樣な時には、何となく誇り顏に見受けられ、土方や車夫と、食卓を共にするのは、之を耻ぢる樣子が見える。最も夫れは私の見損ひかも知れないが、兎に角總ての人を心から同樣に取扱ふといふことは、普通の人には中々出來難いことであつて、私共は往々やり損ふて、心に耻ぢる事がある。其の際には私は自己の拙い所を反省し、先生の御擧動を追想する。我々とは大變な違で先生はあゝであつた、又かうであつたと想ふて、氣を付けるのであるが、卽ちそれ丈け感化を受けて居ります。

以上は、先生の熱心とか、誠意とか、宏量とか、平等心とかを御話したのであるが、先生にはまだ此の外に重要なる物がある。それは一寸言葉で云ひ表はせないかも知れぬが、强いて言へば威貌とか、威嚴と云ふことであつて、近付き易いが、馴れ難い所がある。先生と色々御話して、極めて接近して居るが、そうであつて侵し難い人格の光と云ひますか、何んと云ひますか、說明は出來ませんが、先づ威嚴の「威」と云ふ字が含んで居る。それでなければ、大勢の者を服させる事が出來ないであらう。我々がお話する時にも、先生の言葉の中には、澤山の意味の中に、必ず威と云ふものが這入つて居ります。此れは諸君にも、必ず御經驗のお有りの事と思ふが、御互ひに新島先生のことを、先生といふ中には、之れを仰視し、尊敬する念慮が十分籠つて居る。先生が此の頃病氣だとか、先生が今東京へお出でになつたとか云ふ中に、必ず十分の尊敬心を伴つて居る。先生と云へば、同志社關係の者の間には、當然新島先生を意味

して居る。遂には、同志社關係外の人に向つても、先生が云々と話しかけ、何處の先生のことを云ふのかと聞かれて「無論新島先生さ」と答へて後ち、成程相手は同志社外の人だと氣がついて、自らお可笑くなることがある（笑聲）、然るに先生の名聲は益々擴大し、段々と同志社關係外にまで及び、廣く一般の宗教界、道德界に這入つても、諸人が往々新島先生のことを、單に先生といふ樣になり、我々が先生といへば、直ちに新島先生を指すものだと云ふ事が、分る樣になつて來たと思ふ。初めは小さい同志社の先生であつたお方が、後には大きな同志社の先生になり、後々には日本全體の精神界、道德界の先生に、おなりになつたと思ひます。

私は十四才の時から十九まで、同志社に居つて、先生を偉ひと思ひ初め、爾後、誰か偉い人を見ると、直ぐ先生と比較する樣な氣になつた。何んとなくどちらが偉いかなぞと思ふ。そして我田に水を引くのかも知れぬが、何時も先生の方が偉いと思ふ。或は同じ青年の頃に、福澤先生とか、中村敬宇先生などに教を受けたならば、それ等

の先生をも、偉いと思つたかも知れないが、面會する機會すら得なかつた。唯先生と良く似た點の多くあると思ふ人、此御兩人を比較するのは、或は間違つて居るかも知れませんが、自分勝手に比較すれば、それは、東郷元帥でありまして、自分が海軍大學の教官をして居る時、長官と仰いだ人である。私は東京帝國大學を、明治二十六年に卒業して海軍に這入り、日清戰爭の時には、廣島の大本營と、海軍省を往復して居りまして、當時浪速艦長の東郷大佐とは屢々話をしたが、戰後、東郷少將が海軍大學校の校長におなりになつた時、教官として部下に居り、殆んど毎日面談したが、偉い人だと思つた。當時東郷校長に服せない人は、一人もなかつた。後ち中將となり、大將となり、元帥となられた今日、海軍部内には、東郷さんに服しない者は、恐らくありますまい。東郷さんの熱心は、何人も知る所、常に執心死を以て事に當られる。又其熱心の中に、誠意が十分這入つて居る。度量は廣大であつて、何萬人の部下をも悉く包擁する。又部下を公平によく使はれ、又人間の平等觀を實行せられる。勿論軍人

であるから其間に階級がある、殊に軍人には階級の事が八釜しい。而し夫れと人間の平等觀とは事は違つて、兩者は明かに兩立して、競ひ行はれ得るのである。而して東郷さんは人を平等視し、決して威張る事はない。今では東郷大勳位は、人臣としては一番地位が高い、皇族方の次に直ぐ來るので、總理大臣が幾度變つても、東郷さんの方が上です。殊に先日拜受せられた勳章は、皇族方でも閑院の宮樣御一人にして、人臣では固より東郷さん一人である。所が東郷さんの家はといふと、御氣の毒な程粗末なものである。又止むを得ない時の外は、自動車で町を往來せられない。さうして海軍外の者には勿論、部下の士官等にも丁寧であつて、決して人を見下されない。共々に國家の爲に盡力する、同等の人と思はれて居るのである。曾つて日露戰爭に勝つた東郷艦隊が、横濱に來て、明日、天皇陛下の行啓を仰ぐのであつて、それまでは誰れの訪問をも受けないといふ時に、私は海軍部内の者で、東郷海軍大學校長の下にあり、當時同僚の加藤友三郎君は、參謀長として乘つて居ることでもあるから、訪問して這入ることが出來た。旗艦敷島（三笠は破壞せし故）に行き、先づ加藤友三郎君にあつて「實は東郷さんに逢ひたいのだが逢へるかね」と聞くと「宜からう、今は御暇だ、明日、陛下がお出になるので、それまでは何も用がない」と云ふから「それでは一つ御目に掛らう」と云つて、長官室へ出かけた。何しろ大將は堂々たる艦隊を率ひて凱旋された時であるから、こちらも普斷の心易い樣にゆかない。一寸氣にかゝりながら面會して先づ長官に向つて「此度はどうも洵に御立派な事で」と云ふと、大將は「有がとう、御互に」と云はれた。御互に所ではないが、此の際此の言より、又動作其の言に協ふを見て、豫てより大將は、平等と云ふ事を實行されて居るが、茲にも現はれたと感じた。私は此等の事から、東郷さんは新島先生に似た方ではなからうかと思ひます。

私の如き狹い交際や、局限した境遇に居る者の體驗としては、東郷さんの外に似たお方を見出し得ない。夫れ程に先生は總ての德に於て、整つて居られる方で、先づ私の理想に近い人物であるから、私は自分の足らない所は、先生を手本として、之れを

補ふこととし、それ丈け先生の感化を受けつゝあるのであります。

終りに尙ほ一言しますが、先生の光はデモクラシイの思想が發達すればする程、一層增すことと思ひます。先生の御話なり、御演說なり、又御說敎なりを承つたが、何時も民衆的の思想があつた。玆にある御手紙（陳列しあるもの）を見ても、デモクラシイの事をお書きになつてある。それで世がデモクラシイに進めば、益々光を放つと思ふのである。そこで先生は同志社のみの先生にあらずして、社會全體の先生なることが明かになるのである。私共はかかる先生から直接に敎訓を受け、一生涯の活き手本を得たといふ事は、如何なる幸であらうか。

先にも御斷り申して置いた通り、今夕は自分の體驗を主として先生から受くる感化のことを、お話ししたことであるから、自から話が、自分の事に入り過ぎた感じは致しますが、宜敷御諒察を願ひます。

（拍手）

同志社倶樂部
講演集奥附

昭和二年四月七日印刷
昭和二年四月十日發行

【定價金四十錢】

發行人　兒玉茂
東京市赤坂區青山南町六丁目三十番地
青山會館內

印刷人　中井繁一
東京青山南町七丁目二番地

發行所　同志社倶樂部
東京市赤坂區青山南町六丁目三十番地
青山會館內
振替口座東京四二二九七番

313
326

終